

第28期第1回評議員会議事録

日時：1995年1月24日 17時30分～20時30分

場所：千代田区立中小企業センター
(東京都千代田区神田錦町)

出席者：五十音順、敬称略

(評議員) 朝倉正(日本気象協会)、内嶋善兵衛(お茶の水女子大学)、沖大幹(東京大学生産技術研究所)、加藤央之(電力中央研究所)、佐藤薫(東京大学気候システム研究センター)、二宮洸三(気象庁)、三輪洋次(支部省初等中等教育局)、棕尾尚司(TBS報道局)(浅井富雄氏：広島大学総合科学部は欠席)

(名誉会員) 磯野謙治、吉武素二

(理事長) 松野太郎

(理事長代理) 関口理郎

(理事) 磯部、大西、小倉、斉藤、里村、竹内、田中(博)、永田、中村、新田、藤谷

(監事) 高谷(岩崎監事は欠席)

議事

1. 理事長挨拶

評議員の皆様には、お忙しい中をお集まりいただき有難うございます。

最近の気象学とそれに関連する技術の動向を見ますと、社会とのつながりが強くなってきていることが特徴です。たとえば、昨年夏の猛暑と渇水といった異常気象の予測や、温暖化の問題などが、いままでとは違った重要性をもってきています。従来の気象学会の活動は、どちらかという気象庁と大学との関わりのなかで行われてきたのですが、それを越える社会とのつながりも重要になってきました。

そこで、評議員会についても気象学と関連のある仕事をされているいろいろな分野の方から幅広くご意見をいただけるような構成となるよう心がけたつもりです。日ごろ学会の運営にあたっている母集団とは違った視点から、現在の学会のあり方について忌憚のないご意見をいただければと存じます。よろしく願います。

2. 気象学会活動の概要の説明

庶務担当理事から組織、主たる事業、会員数の動向、財務状況などについて説明。

【朝倉評議員】B会員が少しずつ減っているのはなぜか(松野理事)大学院生の場合、最近では集誌が身近なと

ころにあるので、余計な会費を払わなくても読めるようになったことが原因ではないか。

3. 評議員、名誉会員からの発言の要旨

【二宮評議員】気象集誌などを読んでいると、もう少し気象学会の活動の幅が広がっていいのではないかと思う。他の学会から孤立しているとも見える。他の学会はエンジニアリング的色彩が強いので、もともと枠を越えた交流があるが、気象学会もそのようなことを心がけていただきたい。

(新田理事) 範囲を広げよとのご指摘には同感である。集誌は気象関連分野では唯一の英文学会誌なので、応用的な分野で投稿があればどんどん掲載していきたい。環境問題がらみでは、地表面、植生、海洋、ピナトゥポ噴火などとの相互作用に関係した論文が増えているが、他の分野に比べるとまだ少ない。気象に関する応用分野も発展してきており、逆にこちらが取り込まれてもいる。集誌ではなく、外国雑誌に投稿される例もある。間口を広げながらレベルを高めるなど、外国に流れる成果を集誌につなぎ止める努力が必要だと考えている。

(松野理事長) ポリシーとしては集誌には応用分野も含めているが、なかなか投稿がこない。

【内嶋評議員】特集号を企画して投稿を依頼してはどうか。投稿待ちでは集まらない。

(新田理事) 現在、TOGA、HEIFE で特集号を企画している。今後も適当なテーマがあれば、適宜、特集号を企画したい。

【内嶋評議員】私は農業気象が専門であるが、農業気象の研究も最近では環境工学の分野に力点が移って、気象学会との関係が薄れてきた。しかし、昨年東北での「やませに関するシンポジウム」では一緒にやらせていただいたし、昨年の早魃では気象学会との関係を再認識した。気象学は理学的で高級な学問と見ている人が多い。もう少し、農業気象などの応用分野にも興味をもっていただければと思う。農業気象関係でも気象情報の利用やGIS(地理情報システム)を使う研究が多くなってきているが、そこに気象関係の人が入っていないのはもの足りない感じがする。力を貸していただきたいと思う。

【朝倉評議員】理事の方などは自分の時間を割いてやらねばならず、学会ほど理事使いの荒いところはない。いつもご苦勞だと思っている。私は気象協会にいたので、いろいろなところに出ていく機会が多いが、利用価値のあるものはいくらでも使われるというのが実感だ。予報は当たらないければ使われない。外れた場合もどういう理由で外れたのかの説明が必要だ。気象情報に対する需要の強さをひしひしと感じている。気象予報士の制度ができて、予報士になった人のなかには気象学会に興味をもつ人もいると思う。予報士の名簿を活用すれば『天気』の購読など、もっと増えるだろう。

【棕尾評議員】夏季大学を受講しようとしたときに、気象学会員には割引があると聞いたので入会した。気象のことは何も知らないがよろしくお願ひしたい。『天気』は私たちには読みづらい。もう少し易しいものがでてくればいいのだが、もともと天気に関係したことは好きなのであるが、そういう人間にも学問の最先端がわかるような形で教えてほしい。ボストンのアメリカ気象学会へ行ったことがあるが、会長さんが応対してくれて、meteorologistはこのなかに何人いるかときかれた。われわれは meteorologist というと学者のようで気がひけるが、放送局で天気番組を作っているひとあちらでは meteorologist であるらしい。放送現場のこのような人にも最新鋭の知識が伝わると具合がいいと思う。

（藤谷理事）『天気』では「気象談話室」などで易しい話の企画をしているが、面白い話を書けそうな人は多忙でなかなか原稿が出てこない。情報誌と論文誌の両方の性格があり、その辺が難しい。情報誌に徹すると気象庁の地方官署の人の研究発表の場がなくなる。気象庁の地方官署では良い調査・研究が行われているが、最近では地方での研究成果が投稿されなくなってきた。地方の編集委員に掘り起こしをお願いしている。

【沖評議員】論文は難しいほど価値がある、という価値観はなかなかなくなるだろう。「異常気象のページ」などはアレンジ次第で非常に面白い記事になる可能性があるのではないか。

（藤谷理事）編集委員になるべく負担をかけないように配慮して、あまり手間ひまをかけない形で「異

常気象」などの原稿を作成してもらうように依頼している。難しい点もある。

【加藤評議員】電力中央研究所は全国の電力会社の共同研究機関なので、私は産業界の代表といった意味で選んでいただいたのであろうか。電力中央研究所の気象研究は、昔は電力施設周辺などの狭い地域が主であったが、最近では東アジアの気候変化に係わるようなグローバルなものや、酸性雨などについても興味をもって研究を進めている。これらの研究は、産業界サイドでは限界があり、気象学会の先生方に協力をお願いしたり、国際的な規模の研究グループを作って研究を進めている。気象学と社会との結びつきが強まっていると思うが、それらの間のニーズがうまくかみあった分野で、産・官・学が研究を通じて結びつきを強められればと思う。

【三輪評議員】文部省で教科調査官をやっている。私の場合、教育と気象学会の関わりということになると思う。ひとつには、小・中・高校で日常的に学習していくなかで結びつきである。最近ではテレビ、新聞等で伝えられる気象情報の量が増大しており、気象についての学習が盛んになってきた。環境教育も活発だ。アメリカとの間で気象教育に係わる情報交換なども始まっている。気象情報はかなり公開されているが、アメダスやひまわりを学校で活用できるかどうかひとつの課題だ。学校でも市民講師を招いて話をしてもらうことが盛んになりつつあり、これあたりで気象学会と関わりができるのではないか。もうひとつは平成元年度に告示された学習指導要領の問題だ。昨年あたりから「理科離れ」が問題になっており、気象学会からは来ていないが、物理学会や化学会から指導要領についての要望をもらっている。学習指導要領の次の改訂に向けて、各学会で研究していただきたいと思っている。学習することによって育つ能力を考え、子どもが何を学ぶ必要があるのかの視点にたった検討が大切だ。

【佐藤評議員】気象集誌は他学会の機関誌と比べてもレベルが高く、外国から引用されることも多いが、外国の機関ではとっていないところが多く、こちらからコピーを送るなどして対応しなければならない。もっとネットワークを利用してアブストラクトを配信するなど、宣伝してほしい。

一人の女性研究者としてふり返ると、10年前に比べて女性の数が増え、学会の大会などに出席しても居心地が良くなってきた。女性研究者が実績を上げてきたこともある。そこで、女性研究者の実体や問題点についてのアンケートをとってみたところ、男性16、女性30の46名から回答を得た。女性の学会活動につき、男女差はないと答えた人が86%、女性は不活発とした人の多くも、その理由はまだ女性の数が少ないからだと考えている。参考までに2年前の『Science』に掲載された女性研究者数の国際比較をみていただきたい。日本とよく比較されるアメリカも、女性研究者の比率という視点で見ればヨーロッパの約半分であり、決して多くない。日本はアメリカのさらに半分である。また、アメリカでは修士、博士、大学教官と上のレベルになると女性の比率がだんだん減って「shrinking slice」と評され、問題視されているが、日本は教官になると女性はほとんどゼロで「vanishing slice」だ。現在、学生会員のほぼ15%が女性だが、20~30年後にこの人たちが助教授や教授になっているかどうかだ。職業に対する満足度は88%の女性が満足と答えているが、研究上の不利益では30人中5人がフィールドワークに参加させてもらいにくいなどと答えており、無視できない。就職差別はよくなってきてはいるが、まだ問題がある。仕事環境では良いと悪いが半々で意見が分かれるが、不必要な超勤など子どもをもつ人に対する職場の無理解を訴えた人が複数ある。「性的いやがらせ」に関しては、受けた人が67%、博士課程以上では85%の女性があると答えており、想像以上の高率であった。最後に言いたいことは、女性を男性と同等に扱ってほしいということ。子どもをもつ共働き家庭では、男性も同様の無理解に苦しんでいる。そんな人にも思いやりのある学会であってほしい。

(新田理事) ネットワークに関連して、確かに集誌の内容は国際的にはまだまだ知られていない。いくつかの国際的なデータベースに集誌のきちんとした評価を働きかけているところだ。パソコン通信で学会 BBS をやっているが、集誌についても毎号の目次を入れる予定でいる。ネットワークの進展は急ピッチなので、将来的には経

費の点も考慮に入れながら、アブストラクトをネットに入れていくことも検討したい。

【沖評議員】 専門は土木で、そのなかでも河川工学をやっている。工学では設計外力を決めてからものごとを考える。河川の場合、どういう外力、どういう量の雨が降るかがわからなければ議論のしようがない。そこで、外力の検討をしているうちに、気象との関係がだんだん深まってきた。去年は評議員会で気象予報士試験を受けてみたいなどと発言したことが『天気』に出てしまい、受けざるを得なくなったが、幸いにして受かった。そこで、予報士の名簿を学会の事務局で入手してもらい、これと学会員の名簿を比較して予報士がどれくらい気象学会に入っているか調べてみた。余談だが、学会名簿は地区別になっていて使いにくい。全国一本の方が良い。第1回予報士試験合格者500名のうち43%が学会員であった。北海道と関西が多いのは気象関係の企業関係者が多いからか。学会に入っている予報士のなかでは、気象庁関係者が39%と多い、大学関係は非常に少ない。一方、気象学会の(理事、監事、各種委員などの)役員の所属を調べると、企業関係者はガクッと減り、大学や気象庁関係が断然多い。気象学会は純粋な学問の発展に重きを置いていて、定款の「学会の目的」にも応用分野が全く入っていない。応用分野を取り込んでいくことは、言うのは簡単だが実行は難しい。私自身、予報士試験を受けるのに『天気』が役に立ったことは一度もない。学会がそういう人も取り込もうというのなら、応用分野で活躍している人を編集委員にしてくなどのことが必要だ。大学では民間の人にボランティア的活動を頼みにいくが、学会の中核にそういう企業の人を取り込んでいくのが良い。話は変わるが、大会での研究発表の件数が多くなっており、発表時間を5分に制限するなどで対応されている。しかし、これでは5分なら発表しやすいと思われて、また件数が増え、粗製乱造の悪循環に陥る。悪循環を断ち切ることが必要。

(藤谷理事) 私は土木関係の学会の委員会にも関係している。このような会議に出ていて受ける印象では、一般の会員からみた場合、気象学会は土木関係の学会に比べると、春秋の大会のとき以外

はあまり身近に感じられないのではないかと、学会の委員会活動に気象庁の若い人を中心に多くの人が関係しているのは、学会をより身近に感じるという点からもいいことだ。また、『天気』の編集委員に民間の人を取り込むことは検討したい。

【吉武名誉会員】特に発言することもないが、(名誉会員や理事のなかで) 明治生まれは私ひとりになってしまった。時代に取り残されたような感じがする。進歩が著しいのでいろいろ大変だが、頑張ってほしい。

【磯野名誉会員】今度の阪神淡路大震災に関して思ったことであるが、近年の科学技術、観測、測定(人工衛星、コンピュータを含む)の進歩にもかかわらず、人間の自然に関する知識が極めて不完全なものであることが一般の人びとにはっきりと認められたことは重要である。今後の自然災害に対処するためには、関東大震災などの過去の災害をも新たな視角から見直す必要がある。60年ほど前、当時の中央気象台に入った頃、昼休みなどに岡田武松先生からお話をうかがう機会が多かった。その話題は気象学とその背景ばかりでなく、関連、応用諸分野、社会的な事柄にまで及んだ。これからいろいろのことを学んだことを、今でも感謝の念をもって思い出す。気象学会が気象学の発展を通じて社会に有意義な寄与をするためには、今後、従来にもまして関連分野、幅広い応用分野からの意見を聞き、批判を受け、気象学の内容を豊かにすることが大切であろう。

(高谷監事) 今度、イギリス気象学会から meteorological Applications が刊行された。イギリス気象局も編集などで協力しているようだ。日本でも気象学会と気象庁が協力してアジアを巻き込んだ出版物などを出せればいいと思う。日本化学会では、主として高校の先生を対象とした『化

学教育』という雑誌を刊行して、教育現場の活動に役立つ記事を満載している。気象学会員には現場の先生方やアマチュアの方も少なくないことを考えると、『天気』にこのような方がたを対象とした分かりやすい記事を恒常的に掲載していく必要がある。気象談話室はそのような場であるはずだが、最近、参考文献付きでレベルの高いものがいくつかあった。編集担当者の強力なリードで、各欄の主旨を貫く必要がある。

【吉武名誉会員】(『天気』なども) 案外、外部の人に採算ベースで作らせた方がいいものができるかも知れない。

【佐藤評議員】京大の研究室にいたころ、セミナーなどで理解が難しいことがあると黒板に図を書いて説明したりした。そんなものをまとめれば、「絵とき気象学の本」ができるのではないかと冗談まじりに言っていた。そういうものを『天気』で紹介するのも面白いのではないかと。

(藤谷理事) 今度『天気』に「情報の広場」という欄を新設した。熱帯でマラリアに対処する方法など、従来は掲載しにくかった話題を紹介していく。しかし、どんな欄を作っても、書いてもらわないとどうしようもない。最終的には会員一人ひとりが自覚して学会機関誌を盛り上げていただくことに行き着く。

(大西理事) 長時間のご意見、有難うございました。佐藤さんの女性研究者に関するアンケートは、整理されたうえで『天気』に投稿していただける予定です。沖さんの気象予報士についての調査結果はこのまま『天気』に掲載させていただきたいと思います。

(関口理事長代理) きょうは良いご意見をたくさんいただき有難うございました。これらを理事会や常任理事会で実行していきたいと思ひます。来年の評議員会でおしかりを受けたいと思ひます。長時間有難うございました。